

奥利根 中ノ岐川藤原沢右俣～利根川東俣沢～裏越後沢右俣

佐貫

【日時】 2009年9月19日(土)～22日(火)

【メンバー】L佐貫、棚橋、藤岡

奥利根は、本谷もいいがやはり支流と遡下降が面白い。常に貼り合わせてある「奥利根湖」「兎岳」「平ヶ岳」「尾瀬ヶ原」の地形図を広げると、闊達で懐深い奥利根の渓を巡った記憶が鮮やかに蘇り、次の計画を考えたくなる。そんな時、真っ先に視線が行く先は裏越後沢で、一昨年越後沢右俣を遡行してからは特に「抜けないトゲ」のようにずっと頭から離れない存在だった。本流を遡行してアプローチしようとするオイックイの通過があり、源頭から下降しようにも山越えのひと仕事がある。遡行記録も20年以上前のものしか見当たらない。そう、裏越後沢は自分にとってある意味「奥利根最奥の沢」であった。こんなところに付き合ってくれるメンバーなどいるはずもないと半ば諦めていたところ、本流を遡行したことのある二人が手を挙げてくれ、裏越後沢をメインとする遡下降には願ってもないパーティーが成立したのだった。

土曜朝の始発の新幹線で浦佐まで。奥只見丸山スキー場行きのバスに乗り込み、シルバーライン入口で下車するとそこには予約したタクシーが待っていた。乗り換えて雨池橋までは9000円。支度をして中ノ岐林道を歩き、2時間強で藤原沢出合の橋に到着。予想通りの小ぶりの沢である。右俣には幕場が無さそうなので本日は二俣までの予定だが、入渓して15分で現れた2段5mほどの滝の巻きが意外と悪く、前途に一抹の不安を感じる。幸い、そこを過ぎれば登れる小滝がいくつかあっただけですんなりと二俣に着いた。周囲を偵察するもなかなか快適そうな幕場はなく、結局棚橋さんが発見したツェルト一張り分の台地と畳一畳ほどの焚き火スペースという狭小物件が初日の泊まり場となった。



藤原沢の渓相

2日目、歩き出して間もなく、沢に散乱する古いワイヤーを見つける。いつのものだろうか。小さな支流を分けてすぐ沢は6m滝をかけて左に折れている。ぬめった直瀑で登れないので、手前右岸側から巻き始めるが、かなりの大高巻きとなった。沢は小さいのだが両岸が立った草付になっていて、小さくは巻けないのだ。巻きは時間がかかるので出来る限り登らなければ、ということでその先のこれまたぬめった20m滝は棚橋リード(空身)でロープをのぼすが、岩が脆くて支点も怪しく、見た目より相当悪い。先行きを心配しつつ進むと又もや登れない滝が現れ、垂直木登りでの高巻き、先頭の藤岡さんがお助けをフィックスした所は非常に悪かった。こんなことで今日中に

東俣沢を下降できるのか不安だが、とにかく進むしかない。最後の詰めは藤原山よりも南の鞍部を目指して上がれば標高差は少なく済むが、恐らく濃いであろう稜線の藪を考えると現在地が分かりにくくなりそうなのと、藤原山ピークを目指して忠実に沢型を詰める方が傾斜が緩く登り易いので後者を選択した。山頂と思われる地点よりやや東側に出ると、幸い視界は大変良好で進むべきルートや反対側の丹後沢コボラ、左奥の裏越後沢や稜線上の丹後の小屋まですっきりと見渡せる。ガスでもかかっていたら苦勞すること必至なので大助かりだ。

ここからは、滝が多いらしい喜代志沢に入り込まないように注意しながら背丈を超える藪を漕ぎ始める。もう13時を回ってしまい、東俣沢下降中に時間切れとなる可能性

も頭をよぎるが、落ち着いて読図をし下降開始地点を間違えないようにしなければならない。1663mのポコとの間の最低鞍部を確認し、その先から下降を開始したのが14時50分。しばらくは窪状でこれといった難所はない。更に下っていくと連瀑帯が始まったらしく、ここは左岸から巻き下りることにした。注意深く観察すると獣道のような歩き易いルートが見出せたので、これを辿る。その後は懸垂を2回。17時を回る頃、本流の河原が見えた時には「翼よあれが巴里の灯だ」という感じであった。夜は満天の星空、奥利根の神様が天の川で一日の奮闘を労ってくれているようだった。

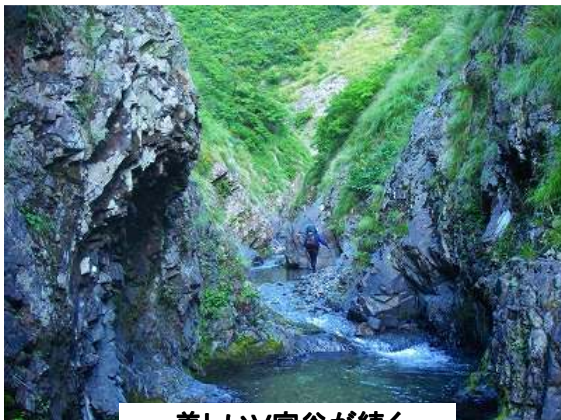


藤原山(左奥)を背に藪を漕ぐ



のパーティーとすれ違い、裏越後沢出合にはほどなく到着。出合の滝は3mと小さいながらも大釜を持ち、見るからに冷たそうだがリーダー責任で先頭で泳いで取り付く。

裏越後沢出合の滝



美しいV字谷が続く

3日目、行程の若干の遅れに不安がないわけではなかったが、本流の水量の少なさや少なくとも一日は天気がもちそうなことから裏越後沢へと進むことを再確認して出発する。定吉沢出合までの間には、

「こんなところあったっけ？」と言いたくなるようなゴルジュがあり、6時前から泳がされた。本流遡行中

水量が多ければ相当な大高巻きとなるだろう。寒さに震えながら陽の当たらないV字谷を遡行してゆくと、すぐに雪渓がかかっていた。足早にくぐって通過。小滝が連続するがいずれも容易で、水量も極めて少ないので左俣出合までは順調に進む。ヌメヌメだった藤原沢と異なり、岩も乾いてきてアクアステルスに履き替えたいような感じだ。中俣出

合の前には崩壊した雪渓があり、オブジェのように浮かぶブロックを流れに落ちないようにおっかなびっくり渡る。

中俣出合からいくつかの小滝を快適に越えると、どうやら核心部の始まりとなる登れない7m滝が現れた。この滝だけなら右岸のボロいリッジから巻けそうに一瞬見えたのだが、偵察の末左岸のルンゼを登り灌木を目指し上がり始めてみるとボロいリッジの上はとてもトラバースなどありえない急な岩壁であることが分かった。左岸の巻きも決して容易ではなく、あつという間にかなり高度感のある急な露岩交じりの草付が始まろうとしていた。ここから落ちたらさすがにまずいので、中段から1Pザイル使用。先ほどの7m滝を皮切りに、深い切れ込みの中に滝が続いているのを見ながらようやく傾斜が緩んだあたりを上流に向かってトラバース開始。どこで沢に戻れるのか不安だが、ルンゼを何本か横切り、かろうじて沢床に近づけそうな場所を探しながらひたすら藪トラバースを続ける。藤岡さんは、重荷が灌木にひっかかったり所々現れる垂直の箇所て腕がパンプしたりと少々苦戦の様。遠く上流方面に三連瀑が見えてきて、これをまとめて巻くかどうかで迷う。一旦降りかけてみたものの、結局その連瀑帯も登れそうにない上、懸垂しても沢床まで届くかどうかというあたりまでしか灌木が無いことが判明した。最初から腹をくくって一気に巻いていれば一時間以上は節約できただろう。後半は獣道らしき藪の弱点を探りつつ、地形図の雪渓マークと滝マークを全て越えたあたりまで巻き続けた（このルートファインディングは面白かった）。



巻きの途中から見た連瀑帯

連瀑帯も終わり、険悪さもなくなった沢に懸垂で降り立ったのは15時近く、幕場を探さねばとキョロキョロしながらまだまだ続く小滝をこなしていく。日没と競争だ。一箇所、10mのぬめる滝でザイルを使い、一旦伏流となったあたりでザックを置いて上流に適地を求めに偵察に走る。小さな崩壊地を整地すればツェルトは張れそうだし、枯れた河原の部分で焚き火が可能、そして水も流れているという場所がかろうじて見つかった。普通なら「何じゃコリヤ〜」というこんな場所も、泊まってしまえば楽しく快適に一晩過ごせるのだから沢屋とは幸せな人種である。

4日目、稜線までの標高差は300mもないと思われ、何とか下り坂らしき天气が本格的に崩れる前に安全地帯に抜けてしまいたいと話しながら出発する。すぐに水が枯れ、沢も大分ガレた感じになってしまった。雨もポツリと落ちてきて、がっかりしながら雨具を着る。つかんだ岩が抜けたりするのに気をつけながら3mほどの滝をいくつか登ると、上半分がハングした滝が立ちふさがった。人工で登るのに挑戦してみればよかったのかもしれないが、時間もかかりそうだったので手前に右から入ってきていた沢を使って巻くことにした。しかし沢に戻ろうにも中間の草付が急だったため、もうこのままこの沢型つめて稜線を目指そうか、ということになる。途中で先ほどの沢を見ると、稜線まで忠実に切れ込みが続いているようで、あの滝さえ突破できていれば・・・と多少残念な気がした。振り返れば越後沢山が高い。越後沢尾根からそこに立った春の日をしみじみと思い出す。沢型が消えると根曲がりの藪となり、これをひたすら漕いでいると1792mの小ピークに出て、魚沼平野と丹後山西尾根の登山道が目飛び込



んできた。あー、ついにここまで来たんだと胸にこみ上げるものがあった。小雨と朝露でビショビショになりながら肩くらいの藪をかきわけ、登山道に出たのは8時40分。



小屋の方から来た二人連れに、「早いですね」と声をかけられて苦笑い。振り返ると3人の歩いた笹藪地帯にうっすらと一本の線が残っているのが何とも嬉しかった。次第に良くなる天気の中、周囲の沢や尾根を眺めながらのんびりと下山。六日町中央温泉で急いで汗を流し、リトル北海道で打ち上げをして山行の成功を祝った。

【メンバーの感想】

裏越後沢ほど、その名が知られているにも関わらず20年以上も前の遡行記録しか目にしない、「遡行されていない沢」は無いのではないだろうか。様々な条件に恵まれ、雪渓に覆われていないその沢を、無事遡行できた幸運に感謝したい。奥利根、しかも本流域を遡行したのは7年ぶりであったが、裏越後沢は原始性が未だ失われておらず、とても感動した。（棚橋）

初日の藤原沢で思いの外てこずり二日目に裏越後沢出合に届かなかったことで一時はエスケープかと危ぶまれたが、なんとか天気も持ちそうで無事に裏越後沢を遡行できました。朝一番の震え上がる泳ぎ、5時間近い高巻き、こんなところで寝れるのか〜と思うような天場での土木作業とハプニングの連続でしたが、最後の藪を詰めて稜線の笹原が見渡せたときは感動ものでした。今年はなかなか天気に恵まれませんでした、いままで一番心に残る遡下降だったと思います。連れて行っていただいた、佐貫さん、棚橋さんに感謝です。（藤岡）

念願の裏越後沢を幸運にも一度目の挑戦で遡行することができて充実感で一杯である。今回は最もマイナーな沢ばかりをトレースすることになり、出発前には多少不安もあったが、条件とメンバーに恵まれ無事にルートを完遂できたことを素直に喜びたい。3人とも出られるところでは前に出るという感じで、荷揚げやルートファインディング、幕場での生活面でもそれぞれの力が発揮されたと思っている。笑いの絶えない、楽しい4日間を与えてくれた二人と奥利根の神様に感謝。

やっぱり奥利根はいつでも、いつまでも特別なところだ。（佐貫）

【グレード】 トータルで4級上

【行程】

9/19 雨池橋 (9:45) - 藤原沢出合 (12:00/12:20) - 二俣 (14:30)

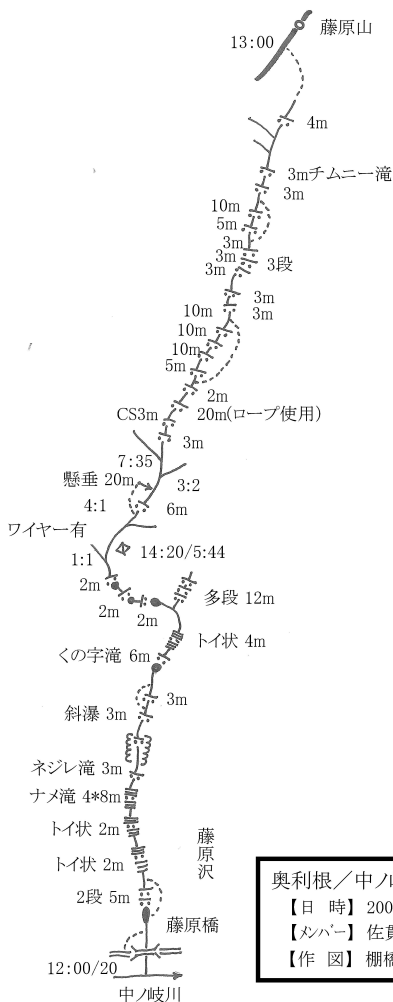
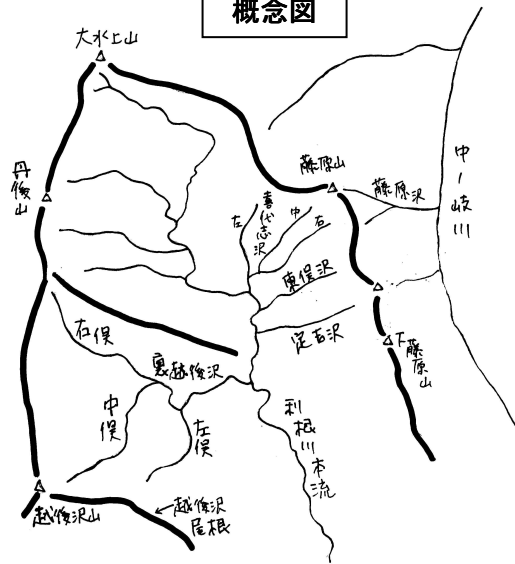
9/20 出発 (5:45) - 藤原山の肩(12:45) - 下降開始 (14:50) - 東俣沢出合 (17:10)

9/21 出発 (5:40) - 裏越後沢出合 (6:22) - 大高巻開始 (10:00) - 連瀑帯の上で沢に戻る (14:55) - 標高1450m付近幕場 (17:15)

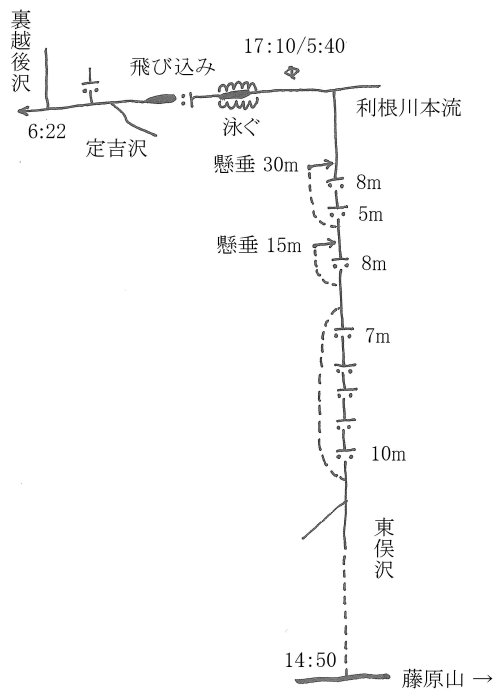
9/22 出発 (6:10) - 登山道 (8:40) - 丹後山西尾根登山道入口 (11:15/11:50) - 十字峡 (12:20)

【地形図】 平ヶ岳、兔岳

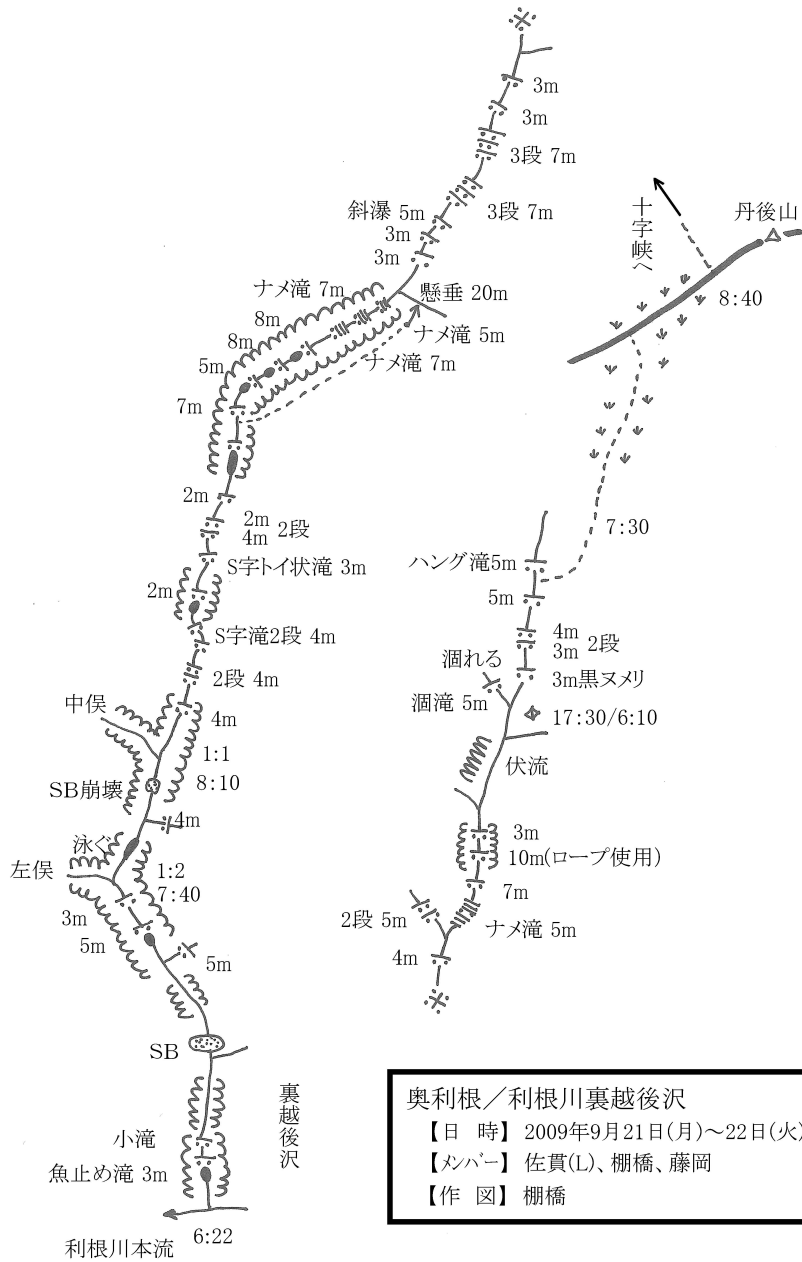
概念図



奥利根/中ノ岐川藤原沢
 【日時】2009年9月19日(土)~20日(日)
 【メンバー】佐貫(L)、棚橋、藤岡
 【作図】棚橋



奥利根/利根川東俣沢
 【日時】2009年9月20日(日)
 【メンバー】佐貫(L)、棚橋、藤岡
 【作図】棚橋



奥利根／利根川裏越後沢
 【日時】 2009年9月21日(月)～22日(火)
 【メンバー】 佐貫(L)、棚橋、藤岡
 【作図】 棚橋